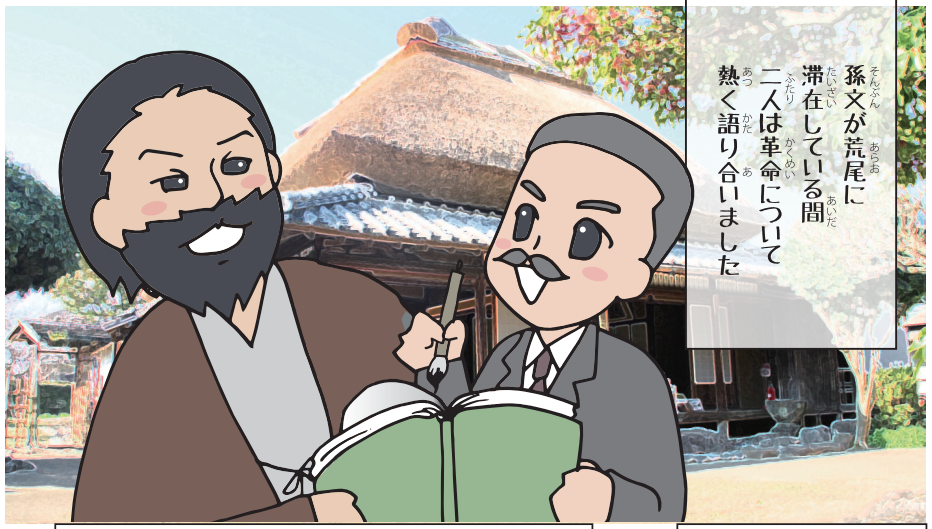
孫文が荒尾に
滞在している間
二人は革命について
熱く語り合いました



滔天と民蔵の妻は
突然来訪した中国
（外国）の革命家に
戸惑いながらも…

ありったけのご馳走で
孫文をもてなしました

また、孫文は民蔵の本棚に
並ぶ本に読みふけり…

帰るときにはカバンいっぱいに
つめて持って行ったそうです

そして滔天は
革命に捧げた
自分の半生を
一冊の本に
まとめました

その本が
「三十三年之夢」で
「この本の中で
滔天は孫文という
すごい人物がいる
という事を
紹介しました

この本は
多くの人に読まれ
翻訳され、海を渡り
中国大陸へも
広まっていきました

その結果、中国国内で
革命を志している
人物たちが、
孫文の存在を
知ることとなりました